薬用植物園だより

2024年 4月

ヨーグルトでお馴染みのアロエベラとは違います

アオワニ

注意：日局では和名の表記がありません

（ユリ科、APG：ワスレナグサ科）

Aloe ferox Mill.

部位	葉から得た液汁を乾燥したもの
生薬名	アロエ（ロカイ、蘆薈）　局方収載
成分	バルバロイン（アントロン配糖体）
薬理	強い瀉下作用
適用	緩下薬、便秘薬に配合される
漢方	配合しない（実用漢方処方集に「蘆薈丸」の記載あり）

南アフリカを原産とする多肉植物。成長は遅いですが、大きくなると2m以上にもなります。2019年から当園で展示していますが、まだ花をつけたことがありません。霜が降りない気候で夏に高温多湿であれば屋外でも生育可能ですが、当園では温室で展示しています。和名のアオワニ（青鰐）は、葉が緑でトゲがある姿に由来しています。薬用部位は葉から出る黄色の液汁を乾燥したものです。一方、観賞用のキダチアロエ *Aloe arborescens* は、別名「医者いらず」とも呼ばれ、民間薬的に用いられてきました。しかし、このキダチアロエやアロエベラは、日本薬局方には収載されず、もっぱら食品として用いられています。

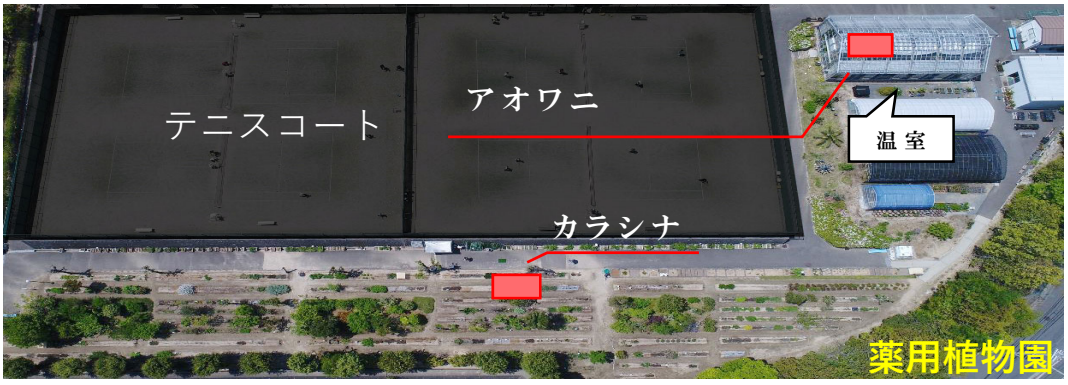
カラシナ（アブラナ科）

辛味ではなく、分類が難しくて専門家も涙がでます

Brassica juncea (L.) Czern.

部位	種子
生薬名	芥子（ガイシ）
成分	シニグリン（カラシ油配糖体）
薬理	健胃作用、鎮痛作用
漢方	配合しない

中近東や中央アジアが原産と考えられている一年草。平安時代以前から野菜として栽培され、和からしの原材料でもあります。一方、明治以降に帰化した野生型はセイヨウカラシナと呼ばれますが、両種ともにカラシナ（広義）とされています。最近の調査では、今の季節によく見かける河川敷の群生は、アブラナおよびカラシナであることが報告されました。種子は芥子（ガイシ）と呼び、辛味性健胃薬や捻挫などの外用薬として利用されていましたが、現在では使用することはありません。写真の種子はキカラシです。成分のシニグリンが水の存在で種子中の酵素ミロシナーゼにより分解されアリルイソチオシアネートとなり強い辛味が生まれます。これは揮発性で鼻に抜けていきます。因みに、同じアブラナ科のワサビも全く同じ反応で辛味を感じています。



ホームページでも
ご覧いただけます

発行：大阪医科薬科大学 薬用植物園　Osaka Medical and Pharmaceutical University Medicinal Plant Garden